

## イントロダクション その2

### ■はじめに

前回から、「ヘブル人への手紙」を学んでいます。中川先生のメッセージ・シリーズ「ヘブル人への手紙」とフルクテンバウム博士のバイブル・コンメンタリー「ユダヤ人信者に宛てた書簡：ヘブル人への手紙、ヤコブの手紙、ペテロの手紙第一・第二、ユダの手紙」に基づきます。本日は、イントロダクションの後半です。ヘブル人への手紙の全体像を、前回と本日の2回にわたり、学びます。

### ■「ヘブル人の手紙」について（イントロダクション その1）

1. ヘブル人への手紙の著者は誰か
  - (1) 差出人の名前は書かれていないので、特定できない
  - (2) 第二世代のユダヤ人信者（ロマ3:2、ヘブ2:3~4）
2. 受取人たちは誰か
  - (1) この手紙の中から受取人については、次の7つのことがわかる。
    - ① 著者と同じく、第二世代である（2:3~4）。
    - ② ユダヤ人である（旧約聖書からの引用）
    - ③ 信者である（3:1、12、6:9）
    - ④ 信者としての経験年数は長い（5:12）
    - ⑤ 霊的にはまだ幼子の状態にとどまっている（5:13）
    - ⑥ 迫害のゆえに信仰が動揺している（10:23~26）
      - 「ことさらに罪を犯し続ける」（26節）とは、故意に確定的・継続的に罪を犯すという意味で、過失や弱さによってつい犯してしまうような罪ではない。特に、この手紙の文脈では、ユダヤ教に戻ることを指す。
    - ⑦ 著者と面識がある（13:19）。
3. 受取人たちはどこにいたか
  - (1) 最も可能性の高い地域・・・エルサレム周辺のユダヤ地方の諸教会（ガラ1:22）
    - ① この手紙が書かれた当時、ユダヤ地方においては、教会の信者たちは厳しい迫害にあい、殉教寸前の状態であった。
    - ② エルサレムの神殿に近い。神殿でのユダヤ教の祭儀（動物の犠牲を捧げる）に戻るという誘惑は、現実のものであった。
4. この手紙が書かれた時期
  - (1) テモテが釈放されたという記事がある（13:23）。テモテがパウロの同労者になったのは、第2次伝道旅行（使徒16:1~3）。この伝道旅行は、紀元48年から51年にかけて行われた。よって、紀元50年頃よりも後に書かれた。
  - (2) エルサレムの神殿の祭儀を現在形で記述。神殿が破壊され、祭儀が途絶えたのは、紀元70年。よって、この手紙が書かれたのは、紀元70年よりも前。
  - (3) 3:17 著者はこの手紙を書いている時期が、十字架からやがて40年に近づいていることを暗に示唆している。十字架は紀元30年。よって紀元70年に近い時期。

- (4) 12:26~27 著者は、地を揺り動かすことについて語る。26節「このたびは」＝「今」→大きな事件が間もなく起ころうとしていることを示す。著者は、ユダヤ人たちがローマに対して反乱を起こす原因となる出来事が起き始めていることを示唆している。実際に、情勢が緊迫する時期は紀元64年から66年の間、これが紀元66年の反乱決起へとつながる。
- (5) 以上のことから、この手紙が書かれたのは、紀元64年と66年の間であると推定される。
5. 歴史的背景
- (1) 「メシア拒否」、その世代のユダヤ人たちが犯した民族的罪→紀元30年の十字架
- (2) それに対する裁き＝紀元70年のローマ軍によるエルサレム攻撃と神殿破壊、それに伴う甚大な死者(110万人のユダヤ人が死んだ)
- (3) ユダヤ人が個人的にその裁きから救われるためには、主イエスの名によってバプテスマを受けること＝イエスをメシアとして認めること(使徒2:38~40)
6. この手紙が書かれた当時の状況と、手紙が書かれた目的
- (1) 反ローマ、愛国主義が強まる中で、イエスをメシアと信じる教会に対して、社会的な圧力がエスカレートして、迫害が起きる。
- (2) ユダヤ人信者の中に、次のような意見が出始めた。
- ① 迫害がおさまるまで、いったんユダヤ教に戻り、エルサレムの神殿での祭儀に参加し、ラビの指導に服そう。
- ② 迫害がおさまったら、また悔い改めて、救いをいただこう。(6:6「もう一度悔い改めに立ち返る」＝新しい救い)
- (3) 著者は、この「新しい救い」という考え方に対して、そんなことをしたら、迫りくる民族的裁きに巻き込まれて、死ぬことになるかと警告する。5回にわたる警告は、いずれも迫りくる民族的裁きに巻き込まれて肉体の死を招くという警告であって、霊的な救いを失うというものではない。
- (4) 著者は、ユダヤ教に戻るのではなく、霊的な成長を目指そう(5:11~6:1、10:33~39)と勧め、信仰の後退をしないようにと励ます(2:3、10:22~25)。

■ 「ヘブル人の手紙」について (イントロダクション その2)

1. 手紙の内容

- (1) 神学的理論: 迫害の中でユダヤ教にいったん戻ろうとする信者たちに対して、どれほどメシアが優れているのか、ユダヤ教の3本柱である「天使・モーセ・レビ族アロン系祭司による祭儀制度」との比較を論じる。
- ① この比較は、「祭儀制度が悪くて、メシアが良い」というのではなく、「祭儀制度も神が与えてくださったもので良いものであるが、メシアはもっと良い」という説明である。
- ② よって、ヘブル人への手紙のテーマは、メシアの優位性である。
- (2) 警告: 神学的理論を教えるだけではなく、そこから導かれる適用として、5回にわ

たり、警告を発している。

- ① この警告の中で、救いを失うという趣旨の内容が語られるが、この救いは「霊的救い」ではない。
- ② ユダヤ人が用いる「救う」ということばは、霊的にも身体的にも使われる。
- ③ ヘブル人の手紙の中では、救いを失うことに関連して旧約聖書が引用されるが、その引用箇所の内容は身体的な裁き、すなわち肉体の死に関するものである (3: 7~17)

(3) 励まし：神学的理論と警告にとどまらずに、励ましを与える。

- ① あなたがたは、雲のような証人たちに囲まれている。彼らのことを思い起こす時、あなたがたはこの迫害を通過する力を受ける (11: 1~12: 1)
- ② 父なる神は、あなたがたを子として訓練される。父の懲らしめを受けるとしても、最終的には、平安に満ちた実を結ぶであろう (12: 7~11)。
- ③ あなたがたは、信仰によって、目の前に置かれたレースを走り抜くことができる。そのときに必要なのは、忍耐である (12: 1)。

## 2. 5つのキーワード

(1) 完全 これは罪がないことを意味するのではなく、未熟に対して成熟を意味する。

- ① 6: 1 「成熟」(完全) を目指す

(2) 永遠 一時的なもの(特に、律法、動物の犠牲、アロン系の祭司職) に対して

- ① 5: 9 とこしえの救い
- ② 9: 12 永遠の贖い
- ③ 13: 20 永遠の契約

(3) 世々限りなく

- ① 1: 8 あなたの御座は世々限りなく
- ② 5: 6 とこしえに、メルキゼデクの位に等しい祭司
- ③ 6: 20 永遠にメルキゼデクの位に等しい祭司となられた

(4) 天の 地上的なものに対して

- ① 3: 1 天の召し
- ② 6: 4 天からの賜物
- ③ 8: 5、9: 23 天にあるもの
- ④ 11: 16 天の故郷
- ⑤ 12: 22 天にあるエルサレム

(5) さらにすぐれた 良きことに対して

- ① 1: 4 御使いたちよりもさらにすぐれた御名
- ② 3: 3 イエスはモーセよりも大きな栄光を受ける
- ③ 8: 6 キリストはさらにすぐれた務めを得られた
- ④ 9: 23 さらにすぐれたいけにえ
- ⑤ 5: 1~10 (アロン系大祭司との比較)
- ⑥ 7: 1~28 (メルキゼデクの位に等しい大祭司の優位性)

## 3. 手紙の構成=二つの主要な区分

- (1) 1:1~10:18 神学的理論を中心に
- (2) 10:19~13:25 適用としての警告を中心に

## 4. この手紙のその後

- (1) 紀元 52 年から 66 年までの 14 年間、4 代にわたるユダヤ長官の悪政（使徒 24:26~27、25:9）にユダヤ人の不満が高まる。急進派は反ローマ・独立を主張して、テロ活動を展開（「シカリオイ（殺人者）」というテロ集団の暗躍）。
- (2) この手紙が書かれたのは紀元 64 年から 66 年の間。この手紙を受け取ったユダヤ人信者たちは、この手紙を読み、そして従った。彼らは、ユダヤ教との関係を完全に断ち切った。
- (3) 紀元 66 年、ユダヤ長官フロールスが属州税の滞納分の代わりとして、エルサレムの神殿の宝物庫から 17 タラントの金貨を没収。これに抗議するユダヤ人たちを強行弾圧。6 月、エルサレムでのユダヤ人の暴動はエスカレートして、降伏したローマの守備隊を全員虐殺する。
  - ① 1 タラント=6000 ドラクマ。1 ドラクマ $\square$ =1 デナリ $\square$
  - ② ユダヤ人の神殿税は、一人年間 2 ドラクマ（マタ 2:24）
- (4) ユダヤ人の穏健派の中心的存在だった大祭司も、急進派のテロに倒れる。
- (5) ガリラヤなどの国主アグリッパ 2 世（使徒 25:13）が暴動の鎮静化を図り、急進派の説得にあたるも失敗。
- (6) カイザリヤはじめ地中海沿岸沿いのギリシア系諸都市に住むギリシア人が危機感をいだき、反ユダヤ感情に火がついて、各地でユダヤ人を攻撃。
- (7) シリア総督ケスティウス、第 12 軍団（アンテオケ駐屯）とアグリッパ 2 世の友軍を率いて南下、反乱に加担するユダヤ人の町々を攻略しながら、エルサレムに進軍。しかし、要塞ともいえるエルサレムの攻略に失敗。冬季の戦闘を避けるため、11 月いったん撤退をする。撤退時に第 12 軍団はユダヤ人に追撃されて惨敗。
- (8) ユダヤ人信者たちは、イエスの預言に従い、ヨルダン川を東に渡り、山地の町ペラに上る。その数は、数万人（エルサレムにいた信者だけでも約 2 万人）。
- (9) 紀元 67 年 5 月、ローマは小アジア駐屯の 3 個軍団（第 5、第 10、第 15）を投入。67 年ガリラヤ制圧、68 年エルサレムを包囲するが、同年 6 月皇帝ネロが自死に追い込まれる事件が起きる。司令官は包囲のまま総攻撃を保留、新皇帝の命令を数か月待つが、本国での混乱のため、いったん軍隊を引き、エジプトで待機。
- (10) 紀元 69 年 7 月、ヴェスパシアヌスが皇帝に擁立される。総指揮官に息子ティトゥスが就いて戦役再開することになる。第 12 軍団も加えて 4 個軍団が参加。
- (11) 紀元 70 年春、ローマ軍はエルサレムの前に布陣して、攻略開始。5 か月に及ぶ激戦の末、エルサレム陥落。
- (12) 捕虜の数は戦役の全期間で 9 万 7 千、エルサレム攻防戦での死者は 110 万。
- (13) 信者たちは、4 年をペラで過ごし、誰一人として戦死した者、奴隷になった者はいなかった。